

ペティ経済学の継承

－ マーチン、マカロック、マルクス (3) －

馬 場 宏 二

ペティ (Sir William Petty 1623 ~ 1688) からマルクス (Karl Marx 1818 ~ 1883) への経済学継承の図柄を描いてみたい。通常の経済学史では、これは労働価値説の流れとして、ペティ→スミス (Adam Smith 1723 ~ 1790) →リカード (David Ricardo 1772 ~ 1823) →マルクスと捉えられており、理論史としてはほぼ差し支えないのだが、継承図となるとそれでは済まない屈折が出てくる。そこを、経済学史のシロウトが恐いもの知らずで試論しようというのである。

屈折の軸は、まずスミスが、先行学説をろくに明示せず、記すばあいにも極めて恣意的に摘記するに留めていたことである。その欠を埋めるべく、『国富論』1904年版の編者キャナン (Edwin Cannan 1861 ~ 1935) が、小姑的に細かく出典捜しを行なっており、それはスミス研究にとって極めて有益なので、キャナン版が『国富論』の標準版でなくなった後も保存さるべきものであるが⁽¹⁾、それにもなお欠落があるように見受けられる。

ペティとスミスを繋ぐ試みはさまざまに行なわれてきた⁽²⁾。シュムペーター (J.A.Schumpeter 1883 ~ 1950) が示した⁽³⁾、カンティヨン (Richard Cantillon 1680 ~ 1734) →ケネー (François Quesnay 1694 ~ 1774) を媒介とする経路は今なお別の解釈によって保持されている⁽⁴⁾。だがペテ

(1) 邦訳では、岩波文庫版の大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』が、水田洋監訳・杉山忠平訳『国富論』に代わった。訳文は新訳の方が良いが、キャナンの註がなくなったのは、いささか残念である。

(2) 管見の範囲で時代順に並べると以下のごとくになる。

A. J.K.Ingram, *A History of Political Economy*, 1888, reprinted 1967

B. W.L.Bevan, *Sir William Petty*, 1894, American Economic Association

C. E.A.Johnson, *Predecessor of Adam Smith*, 1937, Prentice Hall

D. Terence Hutchison, *Before Adam Smith*, 1988, Basil Blackwell

E. T.Aspromourgos *on the Origins of Classical Economics*, 1996 Routledge

このうち A. は歴史学派的学説史。なお後述。B. はペティの或る文とスミスの該当する文を逐語的に対照して両者の連関を見いだそうとする素朴な試み。C. は経済学史の世俗主義的解釈。D. はケインズ主義的学説史だが考証の誤りを含む。E. はスラッフイアンの学説史で説得力を持ち、考証上も頼りになる。

(3) シュムペーター、東畑精一訳『経済分析の歴史 2』、1956年、岩波書店、454ページ、等。シュムペーターは、ペティ→カンティヨン→ケネーの系譜を繰り返し指摘するが、それは経済現象の数量的把握が漸次明確になったという意味であり、計量経済学の枠で捕えた系図に過ぎない。シュムペーターのペティに対する内的評価が低いので、系図は外形的にしかならない。

(4) T.Aspromourgos, *op.cit.* この書もペティ→カンティヨン→ケネーの系譜を重視するが、ペティにおける「労働配分」と「剰余」双方を鍵概念として経済社会把握の深まりを探ろうとする、内的な把握による系図である。

イ説の継承者としては、通常あまり取り上げられないマーチン (Henry Martyn 1665 ~ 1721) と、対極的な意味になるがフランクリン (Benjamin Franklin 1706 ~ 1790) を逸することはできない。

スミスによる忘却の穴を埋めたのがマカロック (John Ramsy McCulloch 1789 ~ 1864) である。彼は忘れられかけていたペティに繰り返し照明を当て、同時に、知られぬままに埋没していたマーチンを、いわば発掘したばかりかその著を自編の名論集に収録することで、後世の継承を可能にした。ところがマルクスは、時にはペティとマーチンをスミスを越えるものと評しながら、この二人を伝えたマカロックに対しては、悪罵を浴びせる以外の評価をしたことがなく、その行過ぎが、自らのペティ評価ばかりかマーチン継承をも制約した。これが継承におけるもう一つの屈折である。

以下、こうした粗筋に沿って、継承における継ぎ目をもうすこし詳しく見て行く。まずペティにおける労働価値説の位置づけから。

I . ペティの労働価値説

ペティはそもそも作家として生涯を過ごした人ではない。彼はまず、行くとして可ならざるなき実践家であった。その全人生を示すゆとりはないが⁽⁵⁾、13歳で家を出て自活の傍ら大学教育を受け、20歳台後半にオックスフォード大学の解剖学教授として高い名声を得ながら、アイルランドへ軍医として赴き、そこで土地調査に関わった挙げ句、年収1万5千ポンド、5万エーカーの地主となって息子に候爵の地位を齎した、と言うだけでさしあたり十分であろう。万能で筆まめだから、実践と関わって書いたものも結構多いが、作家らしく書いたのはある程度資産を得た中年期以降であり、それも実践的な国策提言の基礎を描いていたのである。

著作の概観も極力簡潔にしておく。経済学的諸著作はハルの手で1899年に『サー・ウィリアム・ペティ経済論集』⁽⁶⁾として二冊本に纏められ、残った手稿中から、子孫のランズダウン六世の手で1927年にこれまた二冊本の『ペティ・ペーパーズ』⁽⁷⁾が纏められた。両書に、同様に既刊の、ペティ『アイルランド土地調査史』、これまた子孫のフィッツモーリスによる伝記、友人サウスウェルへの書簡、既成の有力なペティ論の論集を加えた、セコハンの『ペティ著作集』8冊が、1997年にハチスンの序論を付して刊行された⁽⁸⁾。今日利用し得るペティの著作はこれでおおよそ総てであるが、実は1993年に、未公開だった手稿計10000ページが大英図書館に買い取られたという⁽⁹⁾。

(5) 松川七郎『ウィリアム・ペティ』1996年、岩波書店

(6) Charles Henry Hull ed., *Economic Writings of Sir William Petty*, 2 vols Cambridge, at the University Press. 1899

(7) Marquis of Lansdowne ed., *The Petty Papers*, 2 vols, 1927. 1967, Kelly Pb.

(8) *The Collected Works of Sir William Petty*, 8 vols intro. by Terence Hutchison, 1997. Routledge

(9) T. Aspromourgos, *New light on the Economics of William Petty (1623-1687): some findings from previously undisclosed manuscript*, in *Contributions on Political Economy* (2000) 19

取り敢えずハルによる『ペティ経済学論集』に限る。それだけでもかなりの量で、英文で630ページほどになる。ここには、邦訳⁽¹⁰⁾された『租税貢納論』、『政治算術』、『アイルランドの政治的解剖』、小論ながら重視される、「賢者には一言をもって足る」、「貨幣小論」、それに「政治算術別論」⁽¹¹⁾を含むが、他になお、邦訳のない政治算術の小論数点と、「アイルランドの取り扱い」なるやや長い意見書がある。

しかも、これらを通読したからといって、すぐにペティの経済学体系が掴めるわけではない。彼の関心は専ら当面の実践や政策提言にあり、それに説得力を持たせるために、対象となる社会経済の全体構造をいきなり具体的に描き出していた。具体性の把握と数量的認識に極度に高い能力を持つ人物だったから、量的表現を伴う具体的事象の全面的羅列とその構造的総括が基本的手法だった。具体性ある全体構造の感覚的把握。これがペティ経済学の要諦である。形式的配列や特定概念の自己展開による全体像の構成ではない。しかも、需要と供給の関係による価格の変動といった事象には関心がなかった。おまけに、最重要課題が「購買年数」で知られる地価の算定であり、これは利子率による地代の資本還元、つまり擬制商品価格に他ならない。それは、歴史貫通的再生産を商品形態で抱撰した資本主義的生産体系を一旦掴んだ上で、その表層にある高次の商品関係と位置づけなければ、体系的把握をかえって困難にする要因にもなる。

労働価値説はペティ経済学の中ではほんの小部分を占めるに過ぎず、それも彼の主観においては説得力を増すためのオマケに過ぎなかった。しかも決して後世にそのまま継承されたわけではない。それなのに基本的な論理は既にペティにおいて殆ど明らかになっており、結局経済学の源流になり得たところにペティの凄さがある。

労働価値説が出てくるのは、経済学として最初の作である『租税貢納論』だけである。それは財政全体を扱い税収の容易化を提言する著作であり、原文にして100ページほどのものだが、中でむろん地租が論じられる。金納で地代に課せられる。地代を算出した上で貨幣換算すれば地租の負担が明確になる。その必要から、貨幣換算の方法が「副次的な問題」あるいは「余論」として論じられるのである。それが、生産に要する投下労働量の等しい、小麦と銀の等価性、すなわち労働価値説である。

以下、ペティの叙述の順序に従って抜粋する。関連する記述が3ヶ所ほどに分かれているが、纏めれば英文で1ページ分くらいになろうか。まず邦訳で第四章から。

(10) 邦訳はいずれも松川七郎による。以下のごとし。

大内兵衛・松川七郎訳『アイルランドの政治的解剖』、1951 岩波文庫

大内・松川訳『租税貢納論』・「賢者には一言をもって足る」1952 岩波文庫

大内兵衛・松川七郎訳『政治算術』1955 岩波文庫

松川七郎「貨幣小論」、大内兵衛・森戸辰男編、久留間教授環暦記念論文集『経済学の諸問題』1958年、法政大学出版局、所収

(11) 鈴木信之訳「政治算術別論」、法政大学大学院『経済学年誌』1983年所収

この訳は松川七郎の指導下に始められ死後に印刷されたものと言うが、資料の考証は松川流にがっちりしている。

初めに地代が考察される。或る人が一定面積の土地を耕し種を蒔き、手入れし収穫するとして、彼が「自分の収穫物の所収から、自分の種子をさしひき、また同様に自分の食べたもの、および衣類その他の自然的必需品と交換に他人にあたえたものをさしひいたとき、なおそこに残る穀物はその年におけるその土地の自然的な・真実の地代である」。その豊凶変動を平均したものが「その土地の通常の地代である」⁽¹²⁾。ペティはそこから一步進めて「副次的な問題ではあろうが」この現物表示の地代が貨幣でどれほどに値するか、と自問し、以下のように答える。「別の一人の人が、同じ期間中、かりに貨幣の生産・製造に専心従事したとして、自分の費用のほかに貯蓄しえただけの貨幣である」「別の人が、銀の生産される地方におもむき、そこでそれを採掘し、それを精錬し、それを他の人が穀物を栽培しているところにもってくるとしよう、そして同じ人がそれを貨幣に鑄造する等々のことをし、さらにこの人は、銀のために働いているあいだに、生計に必要な食物も集め、衣服も手に入れる等々をすらしよう」。彼の貯蓄した銀は前の人を得た地代と同一価値に評価されねばならない。一方が20オンス、他方が20ブッシェルなら穀物1ブッシェルは銀1オンスである⁽¹²⁾。

さて、ここの基本的論理は、まず同一投下労働で生産された穀物と銀は同一価値になるという認識であるが、単にそれだけでなく、農夫の「地代」と鉱夫の「貯蓄」が等価だという認識を含む。つまり総生産物価値から種子等の生産手段の消費分と労働者の生活費つまり労賃部分とを差し引いて、残る剰余生産物同士が等価だと言うのである。

農業に限ればこの剰余の把握は易しい。総生産物も生産手段や労働力の再生産費も、すべて同一の素材として認識・比較出来るからである。ペティはまた、『アイアランドの政治的解剖』の中でも、牧牛による食糧の増加の例を用いて地代計算をして見せている⁽¹³⁾。この限りでは重農主義学派の「純生産物」(produit net)の概念の先取りだったと言って良い。だがペティ理論は既にそれを上回っていた。鉱夫に貯蓄が出来ると言うことは、農業のみならずあらゆる産業に剰余すなわち「純所収」(net proceed)が生ずると言うことである。つまりペティは、等投下労働等価値の労働価値説のなかに、初めから剰余労働一般を含めて把握していたのである。

小麦の剰余と銀の剰余の等価性を論じたのに続けて、ペティは労働の質の差に言及する。「銀に従事するには、穀物のそれよりも一層多くの技芸と危険とがありうるとしたところで、すべての事態は結局同じことである。というのは、一百人の人をして十年間穀物を生産させ、同数の人をして同期間銀を生産させるがよい。銀の純所収は穀物の純所収の価格であり、その一方のものと同じ部分は他方のものと同じ部分の価格である」⁽¹⁴⁾。うるさく言えばここには問題が残る。農夫と鉱夫で生産に投下する労働の強度や熟練が違ふとしたら、同一労働時間の産物が同一価値にな

(12) 前掲邦訳『租税貢納論』76～77ページ

(13) 前掲邦訳『アイアランドの政治的解剖』133ページ

(14) 前掲『租税貢納論』77ページ

るとは言えず、「所収」に差が出るかも知れない。逆に双方の総生産物価値つまり「所収」が同一だとしても、労働の質の差が賃銀の差に反映するから、「純所収」の方が違って来得る。ペティはその問題を一旦意識しながら、大量観察すれば結果は同じになる、と切り抜けてしまったのである。切り抜け得ると考えたのは、投下労働価値説に投下労賃価値説の表象が混在していたためだったのかも知れない。

この労働の質に関わる問題をひとまず措けば、ここまででペティは、労働価値説の基本のかなりを述べたことになる。同一投下労働同一価値形成説だけではない。価値形成に剰余価値形成が含まれることも掴んでいた。所収から差し引くべき労働者の生活費部分が同一なのだから、剰余生産物同士の等価もいわば予定されていた。ペティの問題意識にしたがって、むしろ同一投下労働剰余同士の等価説が先行したのである。

労働価値説として残るのは生産性の変化に応じた価値の増減である。それはこののち何か所かでふれられる。まず、邦訳第五章に明快な記述がある。「もしある人が1ブッシェルの穀物を生産しうると同じ時間に、銀1オンスをペルーの大地のなかからロンドンにもって来ることができるとしよう。この場合、一方は他方の自然価格である。ところが、もし新しい・しかももっと楽な諸々の鉱山のおかげで、ある人がかつて1オンスを獲得したのと同じ容易さで、銀2オンスを獲得することができるならば、そのときには、他の条件にして等しい限り、穀物は1ブッシェルが10シリングでも、かつて1ブッシェルが5シリングであったのと同様に安価である、ということになるであろう」⁽¹⁵⁾。この引用の前段は、単純素朴な同一労働同一価値説である。だが後段は生産性が二倍になれば価値は半分になるという認識の表現である。産銀労働の生産性が倍加すると、穀物の価格表現は二倍になるが、だからといって穀物入手が困難になるわけではない、と言うのである。

第十四章にも、これと同趣旨の文章がある。いわく「穀物は一人の男が六人分の穀物しか生産しえないところよりも、かれが十人分の穀物を生産するところの方が安い」。「百人で営めるのと同じ仕事を、二百人で営んでいるところでは、穀物は二倍だけ高価であろう」⁽¹⁶⁾。

こうしてペティは、『租税貢納論』の中の地代の貨幣換算問題に関わっただけで、ごく僅かな紙幅の内に、労働価値説の基本を全て述べてしまった。そして、それ以上には繰り返さなかった。だが、類似でも異質の論述が出て来るのが『アイルランドの政治的解剖』における地価—地代の算定である。

同書第九章では、アイルランド各州の資産比較に関して、地価の貨幣換算を行なう必要から、地価をその土地が生産する食糧の量に還元する。ある土地で牛を飼う。増殖肥育で食糧となる肉が増える。そこから牛飼いが食べた分をさし引いたものがその土地の地代になる。それは食糧何

(15) 同上 89～90 ページ

(16) 同上 155 ページ

日分と捉えられる。その上で、「一人の成人男子の日々の労働 (days labour) ではなくて日々の食物が、平均的には価値の共通の尺度であり、それは純銀の価値と同様に規則的恒常的であるように思われる」⁽¹⁷⁾と述べる。「尺度」という表現で一括しているが、価値は投下された労働によって生み出されるのではなく、必要な食物つまり投入された労働者の生活費＝労賃によって構成されると言う捉え方である。

この投下労賃価値説は、概念上投下労働価値説と異なる。量的に言えば、投下労働と投下労賃とでは剰余価値分だけ異なる。ややきつく言うと、ペティはここでは論理的には変説した。しかし、ペティのようにメノコ算的に具体的状況の計測を行なう場合、両者は近似的なものだと捉えても不思議はない。道具や原料等の生産手段消費分を無視すれば、生産費は専ら投入された労働者の生活費で決まる。量的に大差はないし、時間賃銀の関係が一般化していれば、労働量と労賃は比例的に増減する。実践的には、どちらであっても計測結果に大差は生じないことにもなる。

しかも単なる実践上の近似だけではない。有名な「労働は富の父であり土地はその母である」⁽¹⁸⁾という命題から知られるように、彼は経済を労働投下による物質代謝＝社会的再生産過程と捉えていた。そのため、彼の叙述は個々には課題ごとの具体的分析でありながら、いずれも諸分野間の労働配分を含む、全社会的再生産図を背景に置いて描かれるものとなった。価値論は諸商品あるいは諸資産の評価や比較をするためのいわば便法として、「副次的な問題」とか「余論」とか表現されていたが、社会的再生産の視点が貫徹していたために、当然労働価値説に接近した⁽¹⁹⁾。その場合なお、ペティはマルクスなら剰余価値と呼ぶものをも地代の名で捉えていたことに注意する必要がある。彼の認識は極めて体系的になっていた。小麦と銀で投下労賃が同一で地代と貯蓄つまり剰余部分も同一価値なら、量的には投下労働価値説と一致する。後世の経済学のように、叙述の輪郭や順序や抽象度の上での体系化は志向しなかったが、描かれた世界像はすでに実質的体系性を持っていたのである。ただ時代的制約から、剰余が何よりも企業利潤であることには到達しなかった。それがあれば、古典派経済学の骨格はすでにペティにおいて成立していたのである。

Ⅱ．マーチンのペティ心服

ヘンリー・マーチンは、隠れたペティの徒である。彼の発想の底にペティの影響があることは

(17) 前掲『アイアランドの政治的解剖』135 ページ

(18) 前掲『租税貢納論』119 ページ

(19) マルクスは『経済学批判』中のペティ論と関わってホップズが労働に関説したことを指摘している。ハルは *Petty's Economic Writings* の序論 (lxxiii) で、もっとはっきりペティの労働価値説の源流はホップズだと言う。『レヴァイアサン』(水田洋訳、岩波文庫) の第 24 章冒頭の文章は労働価値説に繋がるようであるがまだ距離がある。なお、ハルが挙げた二つのラテン文のうち、*De Cive* ch.XXIV . とあるのは、この本が ch.XVIII でしかないから何かの誤りであろう。*Opera omnia*, III .185 の方は労働論を含むが、『レヴァイアサン』と照応するようである。大東文化大学図書館所蔵本と照合。

歴然としている。だがマーチンは、豊かな独創の才に恵まれ、ペティの命題の鸚鵡返しをするようなことはなかった。その結果、寡作ながらペティを補いあるいは前進させる大きな理論的貢献をしていた。生存当時から知られていれば、当然経済学史にかなりの重みをもって現れて良い人物である。

ところが彼にはまともな伝記はなく、生涯の細部は未だに良く分からない。それどころか、記名入りの著作が一つもなく、生涯に何を書いたのかさえ明らかでない⁽²⁰⁾。主著の『東インド貿易の諸考察』⁽²¹⁾も匿名書であり、19世紀半ばにマカロックがマーチンの名を匂わせたものの無視され、一時はノース説さえ出た。20世紀に入ってからトーマス⁽²²⁾がマーチン作と考証したのにこれも無視され、世にマーチン説が定着するようになったのは1983年にマクラウドがもう一回り確かな考証結果を発表⁽²³⁾してからであった。

著作の範囲さえはっきりしないのだから、ここではこの主著のほかに、『スペクテーター』紙諸号のうち、マーチン筆と目されたもの3点を取り上げる。他に、『ブリティッシ・マーチャント』誌の有力寄稿者で、その功によって輸出入監視官に任ぜられたとされるが、同誌で当面見られるのはチャールズ・キングによる合冊本⁽²⁴⁾なのでマーチン筆の部分を選別できない。また、この職にあった時の意見書⁽²⁵⁾は目下入手不能なので、統計整備に熱心だったこともペティ譲りだと推測できるだけである。

さて、ペティの影響は多面的に現れている。まず、『東インド貿易の諸考察』の序文「読者へ」に、ペティそっくりの方法宣言がある。「この論文にある大部分のことは世の通説とは逆なことである。だから明白な証拠なしに世に送り出すべきではない。このため、著者は、読者を楽しませるために比較級や最上級のみを用いるのではなく、政治算術のやりかたに従って、数、重量、尺度で自説を表現することに努めた。かの幾何学の原理と同様に確かでないことについて信用して語っていると思われぬことを望む」と。

言うまでもなくこれはペティの「私がこのこといをおこなうばあいに採用する方法は、現在の

(20) とりあえず馬場『『資本論』の一文献』、『ヘンリー・マーチンの経済学』大東文化大学経済研究所 Working Paper No.22, No.25 を見よ。

(21) *Considerations upon the East-India Trade*, London, A.&J. Churchill. MDCCI

(22) P.J.Thomas, *Mercantilism and East India Trade* 1926, new impression 1963, Kelly reprint 1970.

(23) Christine Mcleod, Henry Martin and the Authorship of 'Considerations upon East India Trade' in *BULETIN of the INSTITUTE of HISTORICAL RESERCH*, vol.LVI 1983

(24) Charles King ed., *The British Merchant*, 3 vols, 1713. この隔週刊誌はデフォー (Daniel Defoe 1660 ~ 1731) 編集の *The Mercator* 誌にホイッグの側から対抗するオピニオン誌で、通常保護主義と解されているが、反仏ナショナリズムの面が明確にあることに注意すべきである。

(25) T.S.Ashton によれば、輸出入監視官の報告書 *Observations upon the Account of Exports and Imports for 17 Years ending at Christmas 1714* にヘンリー・マーチンのサインがあり、*An Essay towards finding the Ballance of our whole Trade* …は無署名だが文体から見てマーチン筆である。cf, Introduction of E.Schumpeter, *English Overseas Trade Statistics 1697 ~ 1808*. Oxford up, 1960. 因にマーチンはチャールズ・ダヴィナントの次の輸出入監視官であった。

ところあまりありふれたものではない。というのは、私は、比較級や最上級のことばのみを用いたり、思弁的な議論をするかわりに、(私がずっと以前からねらいさだめていた政治算術の一つの見本として、) 自分のいわんとするところを数・重量・または尺度を用いて表現し、感覚にうったえる議論のみを用い、自然のなかに実見しうる基礎をもつような諸原因のみを考察するという手続きをとったからである」⁽²⁶⁾。という文章の言い換えである。似すぎていて、名を挙げていないのだから剽窃だとの解釈もあるが⁽²⁷⁾、狡猾な剽窃というよりは、師の説を頭に定着させていた素直な弟子が、類似の問題に直面した時ひとりでにそれに依拠したものと解した方が良い。実際この書にはペティの名は全く現れず、理論的にもペティ説の蒸し返しは全く見られないのに、論理の骨組みには、分業を踏まえた、投下労賃による価格規定や専業化・技術的開発による生産性上昇といったペティ譲りの認識が確かに込められており、他方で『スペクテーター』中マーチン筆とされる3つの号は、いずれもペティの名を出すかペティの議論を手がかりにして書かれているからである。

主著の内容をひとまず措いて、ペティとの関係を確認する上で『スペクテーター』紙から始める。すでに前稿でマイクロ版を紹介したが⁽²⁸⁾、その後杉本俊朗・水田洋両先生からのご教示があり、改めてボンズ編集の合本で見たところ⁽²⁹⁾、本文・注解を含めて正確に捉え直すことができた。

このオピニオン紙は、1711年3月1日から発行された日曜休刊の日刊紙で、1712年12月6日の555号で一旦休刊となった。うち、236号分が社主のスチール (Richard Steele 1672 ~ 1724)、274号分が主筆アディソン (Joseph Addison 1672 ~ 1719) の署名入りであるが、残りは無署名か筆名である。マーチンはこの40号あまりのうち、3号分の執筆者と目されてきた⁽³⁰⁾。すなわち、1711年9月26日のNo.180、10月19日のNo.200、11月26日のNo.232。

このうちNo.180は、輝かしいものとされるルイ14世の征服が、臣下の人口増加の観点からみればいかに非効率的なものかを論じた文章で、人口増を是とする点でも反仏ナショナリズムの点でも、ペティの『政治算術』を想起させる。しかも筆名の *Philarithmus* は1789年にはニコルズ (John Nichols 1745 ~ 1826) によってマーチンと解説されており⁽³¹⁾、この名がNo.200の文中にも現れるから、No.180にペティの名は現れないが、マーチンがペティを念頭において立論したことはまず疑いない。No.200はこの覇権論を受けた租税論であり、これにはペティの名も、政治算術という用語も現れる。主題からすると『租税貢納論』に近いが、ペティのアイランド論や人口論を下敷きにしている箇所も含む。マルクス『経済学批判』がこれを貨幣論だ

(26) 前掲『政治算術』、24ページ

(27) E.A.Johnson, *Predecessor of Adam Smith, op.cit.*, p.438.

(28) 馬場宏二「『経済学批判』の批判」『経済論集』No.83,2004年7月

(29) Donald Bond ed., *The Spectator* 5vols Oxford Clarmbon Press,1965

(30) *Dictionary of National Biography* による。前掲 Mcleod も同意見。新刊の Oxford D N B 2004 はこれに No.143 を加えているが、根拠不確実である。

(31) Bond ed., *The Spectator, op.cit.*, Vol.1, P.lii および D N B による。ニコルズの文献名は今のところ判らない。

としている⁽³²⁾のは解せない。No.232には、前稿で詳しく紹介したとおり、ペティの名も、明示してないがペティの「政治算術別論」の内容も、登場する。

以上から、マーチンのペティ傾倒がそうとう強いものであったと推測できよう。そこで主著に戻る。大綱はすでに紹介してある⁽³³⁾から、ここではペティとの理論的異同を今日の用語で整理して見る。

『東インド貿易の諸考察』には、明確な投下労働価値説は現れない。輸入がより少ない労働による産物の獲得だと言う主張を軸とするのだから、労働価値説の掘り下げになっていても不思議はないのに現れない。『租税貢納論』の出版は『政治算術』『アイアランドの政治的解剖』より30年ほど古い。マーチンがペティの労働価値説に触れ得ず投下労働価値説だけ知っていたことも考えられなくはない。しかし直接には、Valueという語で価値と使用価値を混同してしまったのが原因かも知れない。東インド製品の輸入が貴金属の流出になり国富を減らすという貿易反対論があった。マーチンはこれを論破するために、この取り引きがより少ないValueによってより大きいValueを得る行為だと主張したのだが、一方で、主要な富はパン・肉・住宅等生活必需品、便益品であり、貴金属は二次的従属的な富にすぎないと、ペティの、貴金属恒久・必需品臨時という重商主義的富概念から脱却した認識を示し、だから布の輸入は貴金属の流出より大きなValueの獲得だとしながら、他方で、インドの布の輸入は他国への再輸出や自国産業の発展刺激によってより多くの貴金属の獲得になるからより大きなValueの獲得になるのだ、と両立させてしまった。彼の議論には強引で牽強附会になるところが時々あり、これもその一例だが、著述の初め⁽³⁴⁾にあったため、価値論への道を塞いでしまったのであろう。

価値論の代わりに需要供給説、労働価値説の代わりに比較生産費説が現れる。ペティと違って需給説を出したため、ケインズ派の学史家を喜ばせた⁽³⁵⁾のだがマーチンの需給説は、需要曲線と供給曲線を交差させる類の議論ではない。需要が大きければ分業の徹底や機械の活用を進め、生産性を上げて労働コストひいては製品価格を下げる、というもので、スミスの、市場の大きさが分業の度合いを決めるという説の先駆⁽³⁶⁾である。

もっとも、これに関わる議論には、論理も用語も読み難いところがある。Price of labourを労働コスト、Wageを賃銀率あるいは賃銀稼得と読んでおかないと理屈が通らない。生産性の上昇によって、Wageは一定なのにPrice of labourが下がるから製品価格も下がり、したがって製品需要が増えるという叙述が繰り返されるからである。しかも生産性上昇によって過剰労働力の排出や労働の単純化が起こることは認めておきながら、賃銀率・賃銀稼得は一定だという暗黙の前提を

(32)『経済学批判』第二章C

(33)前出、註(20)に示した筆者の文章を見よ。

(34) *Considerations upon East India Trade*, Chap. II, p.13

(35) Hutchison, *Before Adam Smith*, op.cit.

(36) マントウがここに着目したのはさすがである。ポール・マントウ、邦訳『産業革命』、164～166ページ。

固持している⁽³⁷⁾。ここはマーチン最大の論理的弱点である。しかしそれを一先ず措けば、彼の議論はペティにもあった労賃価値説である。だから投下労働価値説抜きでも、比較生産費説に接近し得たのである。

比較生産費説への接近は、マーチン最大の理論的貢献である。これもすでに訳文を紹介してある⁽³⁸⁾が、スミスの貿易利益論の、従ってリカード比較生産費説の先駆である⁽³⁹⁾。ペティの労働価値説に比肩するほどに先駆的な理論的功績だと言って良い。ただマーチンはせつかく、ある品を国産するのに必要な労働に比べて輸入品を獲得するのに必要な労働が少なくなると掴んでいながら、インド布の労賃コストがイギリス布のそれより安いので、それが輸入されるから労働が節約された分が利益になる、と直接的対比を強調する場合が多かった。これは彼の主張が、輸入品の競争が国産品の価格を押し下げ、それが生産性上昇の誘因になる、という点に力点があったことの反映だが、下手をするとイギリスの労働とインドの労働との直接的対比にまで逆戻りし兼ねない。孤立した独創者の直面した困難の現れだったかも知れない。現にさすがのペティすら、比較生産費説には想到しなかった。ペティは貿易については、『租税貢納論』や『政治算術』で、生産性を上げれば輸出が増えて貴重な貴金属の獲得に役立つと、重商主義的見解⁽⁴⁰⁾を開陳し、『ペティ・ペーパーズ』中の「貿易」なる長い文章では、具体的現実的な貿易案内を書いたに過ぎなかったのである。

マーチンの独創性はあちこちに発揮されていた。この比較生産費説も、先述の富の概念も、需要と分業の好循環説も、そして紙幣つまり信用貨幣と金属貨幣との、事実上支払い準備率を含めた対応関係を論じた貨幣論⁽⁴¹⁾にしてもその例である。これらはペティのなお持つ重商主義的制約を踏み越えた、スミス説への先駆としての意義がある。ひょっとしたら、実際にスミスへ流れ込んでいたのかも知れない⁽⁴²⁾。

そして何よりも、『東インド貿易の諸考察』の構成が先駆的であった。導入部で貿易差額や貨幣信用を論じ、中心の本論部分で、輸入による競争・分業・機械利用を通じた生産性上昇を論じ、最後部で地代を論じた構成は、やや飛躍気味に言えば、宇野弘蔵の『経済原論』の構成—流通論・生産論・分配論—の先駆である。無論マーチンの場合、政策論争への対応の結果そうした構成が現れたのであって、抽象的な経済理論として意図的にそうした構成を採ったわけではない。しか

(37) *Considerations upon the East-India Trade*, Chap. XII, *The Spectator*, No. 232.

(38) 前掲馬場「『資本論』の一文獻」7ページ

(39) 前掲馬場「古典派の比較生産費説」I - c

(40) 前掲邦訳『租税貢納論』193ページ（「賢者は一言をもって足る」の部分）および、『政治算術』50ページ。これは貴金属重視の富概念と対応する。

(41) *Considerations upon East India Trade*, Chap. VIII, P. 43 ~ 47.

(42) まだ確証はないが、スミスがスペクテイター紙を読んでいた可能性はあるから、それを通じてマーチン説、とりわけ需要と分業の関係を吸収したことは考えやすい。後出註(49), Mizuta 参照。

し彼が貿易政策論争への対応として考えたことは、考察対象をペティの場合以上に純粋な商品経済社会とする効用があった。社会の中心は商人となりモノは商品となる。地主はもはや支配階級ではなく労働者と並ぶ一階級に過ぎない。後に来た古典派経済学が生産中心主義的に構成を考えたのに比べると、マーチンの場合は流通形態から入るという、資本主義の本質を捉えた方法になっていた。

マーチンは今後はるかに注目されるべき存在である。それも、需給説の元祖とかグローバリズムに通ずる徹底的自由貿易主義の元祖とかいったブルジョアイデオロギーに汚された浅薄な意味においてでなく、資本主義社会の本質把握において時代を飛び離れて出現した先駆として。

Ⅲ．間奏曲—フランクリンとスミス

ペティ継承においてこの二人は対照的である。フランクリンはペティの労働価値説を、ペティの名を挙げることなく反復した。スミスは、およそペティの名を全く引かなかったばかりか、政治算術への不信を表明することでペティ忘却を促進した。

フランクリンは今更紹介する必要もない有名人だが、彼の多面的な活動のなかに経済学に関する著作もある。紙幣論、人口論、賃銀論などである。ここでは紙幣論に含まれる労働価値説を取り上げる。

彼は具体的な経済状況から紙幣の増発を要求するパンフレットを書いたのだが、その中で増発が紙幣価値を引き下げないかと自問し、そこから交換、交換手段としての貨幣、貨幣として貴金属が選ばれる、と論じ、その銀自身も恒久的価値を持つものでなくその多寡に応じて値が上下する、そこで価値尺度として別なものが必要になるが、私は労働を採る、と述べて、以下のように言う。

「銀の価値は他のものと同様に労働によって尺度される。一人が穀物を育てるのに雇われ、他が銀を掘り精錬するとしよう。一年末ないしある一定期間の後、穀物の全産出量と銀の全産出量とはお互いの自然価格である。そして、一方が20ブッシェル、他方が20オンスなら、銀1オンスは穀物1ブッシェルを育てる労働に値する。さて、もっと近くに採掘容易で豊富な鉱山が見つかり、かつて20オンス得たのと同程度の労苦で銀40オンスを得られるようになり、穀物20ブッシェルを育てる労働は前と同じだとすれば、銀2オンスは穀物1ブッシェル労働以上の価値はなく、穀物1ブッシェルは銀2オンスでも前と同様に安いであろう」⁽⁴³⁾。

すぐ判ることだが、これはすでに引用したペティ『租税貢納論』の労働価値説の引き写しだか

(43) B.Franklin, *A Modest Enquiry into the Nature and Necessity of a Paper Currency*, Albert Syth ed., *The Writings of Benjamin FRANKLIN*, 1970, vol.2, p.144

ら⁽⁴⁴⁾ 剽窃だが、ここでは、マーチンにおける方法宣言と同様、頭にあることを素直に書いただけと解しておく。マルクスに至っては、労働の二重性に発する商品に関する学説史の中で、ペティ、ボアギェベールに続いてフランクリンのこの文章を取り上げ、ペティそっくりだなどとは一言も言わないままに、「交換価値をはじめ意識的に、ほとんど平板なまでにはっきりと労働時間にまで分析した」⁽⁴⁵⁾と手放しでホメているのである。

フランクリンのこの議論を重視した人は他にいなかったろうから、ここに照明を当てたのは良い。だがマルクスは直前にペティを論じたばかりである。フランクリンの下敷きがペティであることは見え見えなのに、何故それを指摘しなかったのか。ペティもフランクリンも好きだったようだから、フランクリン偏愛のためにペティを無視したとは考え難いし、修辞上の戦術とも考え難い。直前のペティ論評部分には、労働価値説の元祖といった評価は全く出てこないし、引用されているのは分業論に関わる『政治算術』と「政治算術別論」だけである。マルクスは『経済学批判』発行までには『租税貢納論』を読んでいなかった。フランクリンに対する賛辞は、実はペティに捧げるべきだったのである。

マルクスに対する疑問がまだある。彼はフランクリンがこの『紙幣の性質と必要に関する小論』を、青年時代の1719年に書いて1720年に印刷に付したと述べているが、フランクリンの著作集や自伝によると、出版したのは1729年である。フランクリンは1706年生まれ。いくら早熟でも13才でこの種の文章は書けまい。せいぜい、印刷工の見習いを初め、時事小唄を作って売り歩き、『スペクテーター』の一部分を入手して文章修業に努めていた時期である。そもそもペティを一あるいは印刷途中で読むことはあり得た⁽⁴⁶⁾にしても一どこまで知っていたか。『経済学批判』には、考証面でいくつかの疑問が残る。それを指摘しなかったのは前稿の不備であった⁽⁴⁷⁾。

さて、これからがスミス。

『国富論』には、ペティもマーチンもフランクリンも直接には引用されていない。だが同書へのキャナンの註には、ペティ『政治算術』、「賢者には一言をもって足る」それぞれと関わる箇所各一つ指摘されており、スミスがペティに対抗意識を示した証拠と読むことは可能である。フラン

(44) これを指摘したのは、Ingram, *a History of Political economy*, op.cit., p.166、さらに C.H.Hull, Introduction to the *Economic Writings of Sir William Petty*, vol.1, P.lxxi である。日本では福留久大氏が気付いていた。福留「フランクリン、愚考 紙幣の必要と本質」『経済学研究』No.44-2.3号、1979年4月。この論文を看過していて、迂闊にも本稿を脱稿したところで気がついた。論点が重なる場合が多いが、福留論文は資料の探索が広いので、併せて参照されたい。

(45) 『経済学批判』第一章Aのフランクリンの箇所を見よ。

(46) これがあり得たことについては福留久大氏からご教示を得た。

(47) 馬場 前掲「『経済学批判』の批判」はまことに羊頭狗肉であった。一つの註のマカロック非難の検討に専念したが、表題通りなら、少なくとも、労働価値説の元祖はペティでありフランクリンはその引き写しに過ぎない、フランクリン13才で労働価値説を述べたとするのは疑わしい、『スペクテーター』200号が貨幣論だというマルクスの解釈は誤りである、の3点を指摘すべきだった。

クリンとマーチンは名も挙げていないが、キャナンがマーチンを知らず類似点を探そうとしなかった可能性もある。フランクリンは無論知っていたろうが、その人口論が『国富論』の賃銀論にある、アメリカで人口が20～25年で二倍になるとの記述の下敷きだったかも知れないとは想いしなかった⁽⁴⁸⁾。因にスミスの遺蔵書の目録、ミズタ『アダムスミス文庫』⁽⁴⁹⁾には、ペティ、マーチンの本はない。フランクリンの本は3点含まれるが、直接経済学に関わるものはない。ロスの大著『アダムスミス伝』⁽⁵⁰⁾には同時代人フランクリンとの交流は描かれているが、スミスが彼から経済学を学んだかどうかまでは判らない。だがこの書はスミスがペティ『政治算術』を知っていた旨を記している⁽⁵¹⁾。

物証主義に徹すると、スミスは先行三者の説をほとんど知らなかったように見える。本当に知らなければ継承しなくとも、学問的怠慢は責められるが道義的に咎められることではない。しかし、状況証拠からすればペティの影響もフランクリンの影響もあり、ペティはむしろ意図的に無視した疑いさえ出てくる。

そうした深読みをしたくなる原因の第一はスチュアート (Sir James Steuart 1713～1780) の扱いである。これは物証付きの無視である。その『経済学原理』は古典派経済学の対象あるいは輪郭をほぼ決めた著作と見て良く、『国富論』の体系もその枠組みに納まっている。1767年作で『国富論』完成より9年前。スミスがこの書を意識しなかったはずはなく、当然ミズタ『アダムスミス文庫』にも入っている。ところが『国富論』はスチュアートを一回引用しただけである。それも、第一編第十一章の地代論中で銀価値の変動を論じた長々しい叙述の中にメンゲスなる人物を登場させ、この人物についての考証という、どうでも良い論点に関して引用しただけである。内的蔑視の示唆を兼ねたアリバイ工作である。

スミスは通常は善良な紳士の権化のように扱われるから、こうした解釈は下司の勘繰りと誤解され兼ねないが、それなら新訳『国富論』に付された「スミスはパルトニーへの手紙で、自分はスチュアートの名をあげることなく、そのまちがった原理をすべて論破したと書いた」⁽⁵²⁾との註記を見るが良い。そうとう陰険なイジケた振舞いではないか。こうした人物が自らの独創性を装うためにペティ（や、ひいてはマーチン）を意図的に無視したとしても不思議はなからう。因にスチュアートは一箇所だけだが明確にペティを引用している⁽⁵³⁾から、スミスのスチュアート無視は間接的なペティ忘却効果も伴った。無論『経済学原理』が『国富論』の陰に覆われてしまっ

(48) 前掲『諸国民の富』(一) 233～234ページ vs Benjamin Franklin *Observations concerning the Increase of Mankind, Peopling of Countries, etc.* 1751, in syth ed, *the Writings of Benjamin ERANKLIN*, vol.3,

(49) Hiroshi Mizuta, *Adam Smith's Library catalogue*, 2000, Oxford UP

(50) IS ロス、篠原久／只腰親和／松原慶子訳『アダム・スミス伝』2000年

(51) 同上書 158ページ

(52) 岩波文庫『国富論』1, 18ページ

(53) ステュアート、中野正訳『経済学原理』、岩波文庫(一)、129ページ

た主因がスミスによる軽視だとまでは言えまい。『国富論』は文体の明晰さと時代先取りのな自由主義思想の徹底において『経済学原理』を上回っていた。理論的高低についてはなお最終判断を保留しておくが、先行諸説を直接間接に吸収し、諸説間の統合や調和や折衷や併存を図る思考を続けるゆとりは遙にスミスの方が恵まれていた。この差と文体の差が重なって示す完成度の違いが、『経済学原理』を『国富論』の陰に押し込んでしまったのではない。

さて深読みする理由の第二は、スミスがわざわざ「政治算術」に不信を表明していることである。いわく「私は政治算術をあまり信用していない。そこで私はこれらの計算のどちらについても、正確さを保証しようとは思わない」。(54) ダヴィナント (Charles Davenant 1656 ~ 1714) やキング (Gregory King 1648 ~ 1712) の名を複数回挙げながらついにペティを挙げなかったスミスが、ペティの造語であることが伝わっていたであろう「政治算術」に、こと改めて不信を語ったのは、単に記録された数値が不正確だと嘆いたのではなく、ペティへの対抗意識の表明だったに違いない。スミスは『政治算術』は見たろうが、その主題である英仏争覇はもはやイギリス優勢に傾いていたから、感銘はなかったのであろう。となればペティの扱いは軽くなる。『租税貢納論』は自分の租税論の箇所言い換えで利用したのかもしれないが、あるいは、探索しようとせず知らないままになったのかも知れない。彼の価値論はむしろ支配労働価値説である。

IV. マカロックの先人発掘

リカードは経済学者として数少ない天才だが、古典教育を受けずに証券業で成功し、病妻の保養に行った温泉でいわば徒然を紛らわせるために『国富論』を読んで経済学に開眼した。スミスが無視したペティやスチュアートをリカードが改めて発掘したりするはずがない。

こうして古典派経済学はペティを忘れ去ろうとしていた。事実、その後のイギリス経済学の主流、ミル (J.S. Mill 1806 ~ 1873) の『経済学原理』1848年にも、ジェヴォンズ (William Stanley Jevons 1835 ~ 1882) の『経済学の理論』1871年にもペティは出て来ない。マーシャル (Alfred Marshall 1842 ~ 1924) の『経済学原理』1890年に至ってようやく登場するが、これはぼつぼつペティ発掘が始まるころである。

マーチンはペティ以上に無視され続けた。そもそも存在を知られていない。著書は匿名小部数出版で、初版が『東インド貿易の諸考察』、再版が『イングランドにとっての東インド貿易の諸利益』と書名が全く異なり、副題も出版社さえも変わっていた。この事情はこう推測できる。初版は作ってみたものの売れずゾッキ本化した。それに目をつけた別の書肆が、著者が多少世に出たとこ

(54)『諸国民の富』(三) 212 ページ。この件はシュムペーター前掲『経済分析の歴史 2』, 212 ページから学んだ。が、シュムペーターは、スミスが彼の性分から、単に大事を取ったに過ぎないと解している。それにしてもこの書き込みがわざとらしい。

ろで買い取り、派手な書名と副題を付けた表紙に付け替えただけで売ったのが再版だった⁽⁵⁵⁾、と。スミス・リカードそれぞれの傾向からして、かような著作を改めて世に出そうとするはずもないから、マーチンはペティとともに忘れられたままになった。ところが面白いことに、古典派の寵児マカロックがこの二人に改めて光を当てたのである。

マカロックは理論家として独創性を持つ人ではなく、論理一貫性にすら欠けるところがあった。そこはマルクスが厳しく衝いた⁽⁵⁶⁾ところである。だがマルクスがそうした論理的批判とは一応別に、鬱憤晴らしのようにマカロックに悪口を投げ続け⁽⁵⁷⁾たから、彼に対する後世の評価は極めて低くなっている。今日の日本でマカロックを読破した経済学者が何人いるだろうか。実は筆者自身、著作⁽⁵⁸⁾をきちんと読んだことがなく、生涯についても詳しくない。近刊のODNBの記事を下敷きに⁽⁵⁹⁾ごく簡単に見ておく。

天性ジャーナリスト的に博識多作な人だが、経済学は独学で、リカードと交流したことで社会的に著名になり経済学クラブの会員にもなった。エディンバラ大学での教授職が得られず、1828年に新設のロンドン大学経済学教授になったものの、大学と金銭的な抗争があったらしく、1837年には辞して、翌年高給の文房具調達局監視官になった。最初の職業的経済学者と言われる。『経済学原理』等の学術書のほか、『実践的理論的歴史的商業航海辞典』、『大英帝国の統計的解明』といった啓蒙的実用書を編集したが、ジャーナリスト的な仕事から次第に経済学史的な仕事に移っていった。こうした人物が、学説の中継点としては極めて重要な役割を演じたのである。

学史のシロウトとして乱暴に断定するが、マカロックは19世紀中のペティ復活に不可欠な存在だったばかりか、後世のマーチン継承を可能にしたほとんど唯一の経路⁽⁶⁰⁾となった。このことだけでも、経済学の流れの中継点としてのマカロックの重要性は自明であろう。さて、彼がペティとマーチンを取り上げた本は、管見の限りでは以下の5点である。

(1824)『経済学の勃興・進歩・目的・重要性に関する講義』⁽⁶¹⁾

(55) この推測は、英訳『資本論』のソネンシャイン版とグレイシャー版との関係に関して杉本俊朗氏から教えられた出版事情(馬場『経済学の活き方』261ページ註(6)参照)を適用した。さらに200年前のことだから当然こうなろう。

(56) 『剰余価値学説史』第20章四、大月書店版『マルクスエンゲルス全集』26Ⅲ, 219～247ページ。このマカロック論評は内在的な論理的批判に徹しており、他の箇所のマカロック非難と違って説得力がある。

(57) 馬場『『資本論』も読み方』『経済論集』No.82,2004年2月、参照

(58) 学術的著作は *The Collected Works of J.R. McCulloch*, intro. by D.P. O'Brien, 8 vols 1995, Routledge/ TEmmes なるセコハン著作集で見られるが、マカロックが編集した大部の名論選集や統計的概観や辞典の類はこれに入っていない。序文を書いたオブライエンはマカロックの学説史上の仕事にはあまり興味がないらしい。cf. D.P. O'Brien, *J.R. McCulloch: A Study in Classical Economics*, 1970, George Allen and Unwin

(59) *OXFORD DICTIONARY of National Biography*, 2004

(60) マルクスはマカロック同様マーチンを高く評価したが、彼のマカロック嫌いが初版名や著者名の引用を妨げ、再版名のみを表示に固執したため、マーチンを後世に伝える経路となれなくなった。名論集へのマーチン収録を含めて、マカロックが唯一の継承経路になったと言って良い。

(61) *A discourse on the Rise, Progress, Peculier Objects, and Importance of Political Economy*, in *Collected Works of J.R. McCulloch*

- (1825)『経済学原理』⁽⁶²⁾
 (1845)『経済学文献 分類目録』⁽⁶³⁾
 (1856)『イギリス初期貿易論選集』⁽⁶⁴⁾
 (1856)『稀少重要貨幣論選集』⁽⁶⁵⁾

最初の『講義』は、チャイルド、ノースと並べてペティに触れ、「貨幣小論」と『アイルランドの政治的解剖』を挙げている。そればかりか、「注目すべきパンフレット」として『東インド貿易の諸考察』を挙げ、「著者(つまりヘンリー・マーチン)は東インド製品の輸入を禁止せよという議論に有効に反駁し、分業の効果について印象的な例証を示している」と注解している⁽⁶⁶⁾。この本の仏訳がすぐ出たらしく、マルクスが初めてペティを知ったのはこの仏訳からだったものと解されるが、それはマルクスを扱う節で詳論する。

二番目の『原理』が理論的主著である。ペティは二度扱われる。一つはマンやチャイルドやノースと並んで、重商主義の枠内にあるが自由主義への傾斜を示した優れた理論家として⁽⁶⁷⁾。ここは『講義』の場合と同じ扱いである。だがもう一つ、労働価値説の提唱者つまりリカード理論の先駆として扱われる。末尾近くの長い註だが、ここでは、『租税貢納論』の肝心な箇所を三つ―等労働投下による穀物と銀の等価性、穀物地代と銀地代の等価性、農夫 200 人で 100 人の仕事をするとところでは穀物価格は 2 倍になる―を引用しながら言う。「ウィリアム・ペティは、商品の価値が生産に要した労働に依存することを明確に述べた最初期の著作者の一人である」、「これらの諸行は、リカード氏があのように完全に述べた理論の最初の萌芽を示している点で興味深い」⁽⁶⁸⁾。差し当たり、見事な位置付けだと言う以上のコメントは不要であろう。なおこの『原理』には、フランクリンの賃銀論を、高賃銀が怠け者を生むという説として批判的に取り上げている⁽⁶⁹⁾。さらに『東インド貿易の諸考察』も注記されているが、その扱いは『講義』と同じである。

三番目の『経済学文献分類目録』はすでに紹介したことがある⁽⁷⁰⁾が、直接にはインテリ・エリートのための経済学読書案内である。計 1000 点ほどの文献が取り上げられている中で、『国富論』各版の紹介が合計でもっとも多く紙幅を取っている。ついで『東インド貿易の諸考察』が、再版

(62) *The Principles of Political Economy*, 4th ed., 1849, in *Collected Works of J.R. McCULLOCH*

(63) J.R. McCULLOCH, *The Literature of Political Economy: a classified catalogue of Select Publications in the different departments of that science*

(64) J.R. McCULLOCH ed. *Select Collection of Early English Tracts on Commerce*

(65) J.R. McCULLOCH, ed., *A Select Collection of scarce and valuable Tracts on Money*

(66) McCULLOCH, *A discourse*……op.cit., p.37, p.40

(67) McCULLOCH, *Principles of Political Economy*, 1849, p.40. なお、この『原理』は、初版 1825 年、以下、

1830, 1843, 1849, 1864 と版を重ね、版ごとに少しづつ違う部分があるが、ペティと『東インド貿易の諸考察』の示し方はページが異なるだけで記述は変わっていない。

(68) op.cit., p.377

(69) op.cit., p.430

(70) 馬場、前掲、「『資本論』も読み方」、90 ページ

名『東インド貿易の諸利益』であることも含めて激賞交じりに詳しく紹介され、著者がヘンリー・マーチンであることも示唆されている。単一書としては際立って多くの紙幅を使っている。これに準ずる紙幅でペティの代表作が、飛び飛びにだが網羅的に紹介されている。「貨幣小論」、『政治算術数論』、『アイルランドの政治的解剖』で、これにペティを「17世紀における最も注目すべき人物」として詳しく紹介をしている。そして『租税貢納論』を取り上げ、その紹介中に「商品価値はそれを生産し市場に持ってくる労働によって決まるとする、リカードが確立した基本原理を、注目すべく明確に述べた」と記している。グラントの『1696年イングランドの状態の自然的政治的考察』の紹介にもペティの役割に触れている。

以上から、マカロックが1824年までにはペティにもマーチンにも重要な説として注目しており、1825年にはペティ『租税貢納論』中に労働価値説が含まれると明示していたことが判る。そもそも『講義』が経済学史として構成されていたことは注目に値する。ここまでに、世に『経済学史』と名乗る本がいくつ存在したろうか。マカロック35才、経済学教授の職を得る数年前であり、職業上の必要から改めて学史を勉強したのではなかろう。慧眼と讃えて差し支えない。

無論完全だなどと言うのではない。『経済学文献分類目録』中に粗雑なところがある。本になった『政治算術』と、政治算術別論を含む『政治算術数論』や『政治算術五論』等政治算術と名のつく小論集の関係の考証が不完全で、マカロックがペティの作品を完全には掴んでいなかったことを露呈している。その不完全が、後にマルクスの非難を齎すきっかけとなったのである⁽⁷¹⁾。

四番目と五番目は、リカードやマルサスが結成し若きマカロックも加わった、ロンドンの経済学クラブが、もはや脱会したマカロックに要請し、それに応えて彼が手持ちの文献を素材に編集して解説的序文を加えた、会員頒布用の名論集である。貿易論集の中に『東インド貿易の諸考察』が、解説的序文における新たな激賞とともに、最大の紙幅を取って全文採録されている。後世、20世紀末のマクラウドの考証が現れる以前にマーチンを論じた人は、内外計で20人程度だが、マルクス(再版)、マントウ(初版)、トーマス(P.J.Thomas - 不詳、彼は初版・再版双方を比較している)を除けば、尽くマカロックのこの覆刻版で読んでいた。マルクスは、おそらくマカロック編のこの本は知らずに大英図書館蔵の再版を使っていたのであろう。マカロックはマーチンの書名や副題や出版社を間違えて記録している⁽⁷²⁾が、書名は『講義』以来、uponでなくonと書いている。

五番目の貨幣論集にはペティの「貨幣小論」がフランス風の著者名Petytの作として収録されている。なお、マカロックがオーヴァストーン卿のために編集した五選集のうち『希少有益経済

(71) 馬場前掲、「『経済学批判』の批判」

(72) 本文は正しいのに表紙の記事はほとんど間違えた。初版がマカロックの手許になかったのであろう。彼の蔵書には初版、再版ともに含まれない。cf., *A catalogue of Books, the Property of a Political Economist, 1862, in the Collected Works of J.R. McCULLOCH, op.cit.*

論選集』⁽⁷³⁾中にはフランクリンの著作も含まれている。

これだけの簡単な紹介からも、マカロックがペティ再興、マーチン継承のために極めて大きな役割を演じたことが判るであろう。『経済学原理』は1864年までに6版を重ね、その間に『経済学文献分類目録』が出ているから、それだけでもこの両先学を世に知らしめる効用があったであろう。マーチン継承については上述のごとく『イギリス初期貿易論選集』がなければ後世これを読めた人は一・二に留まったはずである。この件はすでに詳しく紹介したことがあるから⁽⁷⁴⁾繰り返しは止め、ここではペティ継承におけるマカロックの役割に立ち入っておく。1899年、C.H.ハルの編集で『サー・ウィリアム・ペティ経済論集』が刊行された。その「序文」に言う。「この論集編纂はWarrantなしには企画されなかった。マカロック、ロッシャー、イングラムといったさまざまな人からの批判がペティの経済学的パンフレット集の必要に注目させ、彼の子孫にその刊行を二度まで考慮させた」、と。

つまり、ペティ経済論集を作る刺激になった筆頭がマカロックなのである。実際彼自身「ペティの子孫には彼の多くの能力が伝わっているだろうが、先祖の記憶としては完全な著作集を刊行する以上の記念碑はない」と、いくぶん挑発的に著作集の必要を述べていた(『経済学文献分類目録』)。そればかりではない。ロッシャー(W.Roscher 1817～1894)は1851年に『イギリス経済学史』を出し、その中で全11章中1章をペティに当てているが、この章は5回ほどマカロックの名を挙げている。マカロックなしには19世紀中葉における外国人のペティ評価もなかったのであるが、因にロッシャーも「彼の著作の優れた全集は今なほ存在しない」⁽⁷⁵⁾と述べていた。

ハルがつぎにマルクスを挙げていないのは不審である。『経済学批判』刊行は1859年だからロッシャーのすぐ後である。そして同書はペティを商品論史の筆頭に挙げるほど重視し、その中に長い註を付してペティの説を激賞し、ついでその著作が稀観本になっているのに子孫が全集を出さないのはおかしい、と述べた挙げ句、出すとなると初めに人物論が必要になるが、ペティの人物に不都合なところがあるので全集も出せないのだろう、と憎まれ口を叩いている。ハルはドイツ語文献をいくつか使用しているから『経済学批判』が読めなかったわけではなかろうし、パラパラ見ればペティの名はすぐ出てくるのだから、気付かなかったとも言えまい。承知の上で無視したのである。マルクス主義が広く受け入れられて来た19世紀末のことだから、イデオロギー的マルクス嫌いと言うよりは、マルクスの憎まれ口がカンにさわったので無視したのではないか。あるいはスポンサーのラウンズダウン家の意向もあったか? 因にマルクスは、マカロックに対しては悪口雑言の限りを尽くしているが、ペティとマーチンは明らかにマカロックから教えられたのである。ここにもマカロックの間接的影響がある。

(73) J.R.McCULLOCH ed., *A Select Collection of Scarcely and Valuable Economical Tracts* …… Privately Printed for Lord Overstone, 1859

(74) 馬場前掲『ヘンリー・マーチンの経済学』

(75) ロッシャー、杉本栄一訳『英国経済学史論』同文館1929年、145ページ

イングラム (J.k.Ingram 1823 ~ 1907) は、歴史学派的経済史家である。彼は『大英百科事典』の1885年版に“History of Political Economy”という長い項を書き、これは後に独立の著書⁽⁷⁶⁾になる。ギリシャ・ローマから説き起こすスタイルはマカロックの『講義』に似ているが、直接マカロックの影響か否かは判らない。そしてこの項にはペティの著作集についての要望はないが、同じ百科辞典の“Sir William Petty”の項には「マカロックがずっと以前に指摘したことだが、ペティの著作の完全で統一的な版がまだ存在しないことが悔やまれる」とある。この項に筆者名がないが、イングラムと見てよかろう。かようにマカロックが直接間接にペティ再興の源泉であり続けたことは疑いない。

V. マルクス

マルクスがペティとマーチンを知ったのは1845年であろう。1843・4年にエンゲルス (Friedrich Engels, 1820 ~ 1895) が『国民経済学批判大綱』を書き、リカードはスミスより罪が重くマカロックとミルはリカードより罪が重い、価値についてフランス人セイは効用で計れるとしたがイギリス人マカロックとリカードは生産費で規定されるとした、と刺激的な文言を記していた⁽⁷⁷⁾。マルクス自身このパリ時代に、後に『経済学哲学草稿』になった文章で何人かの経済学者の名を並べた⁽⁷⁸⁾が、この草稿はしばしばエンゲルスを下敷きにした、経済学というより哲学風市民社会批判である。

1845年になるとマルクスはブリュッセルに移り、パリ時代に始めた伝説経済学文献の抜粋を本格化する。そしてその夏、エンゲルスに伴われてマンチェスターに旅行し、図書館漁りに熱中した。MEGAで見る限り、英語で経済学研究を始めたのはここからである。エンゲルスも同様に読書ノートを作っていたが、この年彼の『イギリスにおける労働者階級の状態』が出版される。因に同書はマカロックの『大英帝国の統計的説明』も資料として用い、著者をブルジョアのお気に入りとして野次っている⁽⁷⁹⁾が、後のマルクスほどドギツク悪罵してはいない。先行者エンゲルスが実質的な成果を挙げた。その衝撃を含めて、1845年はマルクスが本格的に経済学研究に取り組み始めた年と言ってよかろう。

ペティとマーチンを知ったのはほぼ同時だったと言えよう。MEGAの編集に作為がなく、かつノートが時間順に配列されていると仮定しての話だが、マルクスのノートにペティが現れるのはブリュッセル・ノート No.6。ついでマンチェスター・ノートの冒頭にペティ「政治算術別論」が現れる。そのすぐ後にペティ、マーチン双方を詳しく紹介したマカロック『経済学文献分類目録』

(76) Ingram, *A History of Political Economy* op.cit.

(77) エンゲルス「国民経済学批判大綱」大月書店版『マルクス・エンゲルス全集』1 545,549 ページ

(78) マルクス、城塚昇、田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波文庫、116 ページ

(79) エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』、大月書店版『マルクス・エンゲルス全集』2, 530 ページ

が取り上げられているが、そこに理解困難な歪みがあること後述のごとくである。

MEGAのブリュッセル・ノートは計6点あり⁽⁸⁰⁾、No.5までは全て仏語か仏訳の経済書の抜粋で、計24冊分ある。原本全てに当たることは到底できないから、ここまではペティはマルクスの目に出現しなかったと仮定しておく。仮に出ていても同じ1845年のもっと早期になるだけだから、判断の大綱は変わらない。

ノートNo.6には計6冊分の抜粋が含まれるが、最初のペチオ『イタリア経済史』は原本が見られない。続いてマカロック『講義』の仏訳⁽⁸¹⁾、ガニール『経済学体系』⁽⁸²⁾、ブランキ『ヨーロッパ経済学史』⁽⁸³⁾があるが、この3冊はいずれもペティに触れている。

マカロック『講義』の仏訳本は見られない。しかし英語の原書にペティの名があり、「貨幣小論」と『アイルランドの政治的解剖』を引用していた。その少し後に「東インド貿易に関する小冊子の匿名の著者」が出てくる。これらは仏訳でも変わりはあるまい。マルクスはこの本を経済学史入門として読んだ気配があり、ノートには、仏訳書から著名経済学者の名が抜粋され、チャイルド・ペティ・ノースと並んだところに、ペティの二著も引用符付で記録されている。「匿名の著者」はつまりマーチンだが、これは匿名のせいもあり、重要な解説が欄外註に入っているせいもあろうか、マルクスはノートしていない。

ガニール『経済学体系』。これは『租税貢納論』中の労働価値説の部分を長々と引用しているのだが、マルクスはこの書からペティの名は拾ったものの、この理論的部分は抜粋していない。だがこのガニールによるペティ引用部分は、『剰余価値学説史』と『資本論』に関わって後に問題にせざるを得ない。

ブランキ『ヨーロッパ経済学史』は、巻末文献目録にはペティ『アイルランド関連諸論』、『政治算術数論』が列記されているが、本文中どこで使われているのかが判らない。そしてマルクスの抜粋が一取らなかったのか失われたのか一ひどく短くて20ページ分で終わっているから、この際役に立たない。

ノートNo.6のその後は、ヴィエガルテル『革命前フランスの社会思想』とJ.ワッツの『経済学者の事実とフィクション』である。後者は英語だから、あるいはマンチェスターから戻った影響があるのかも知れない。

そこでマンチェスター・ノート⁽⁸⁴⁾。抜粋の冒頭がペティ「政治算術別論」である。MEGAの目次では『政治算術数論』として一括されているが、ノートで実際に抜粋されているのは『人

(80) MEGA, IV-3 Text

(81) McCULLOCH, *Discours sur l'economie politique*,

(82) Charles Ganilh, *System d'economie politique*, 2me ed., 1821. 一橋大学社会科学古典資料センター本。初版は第二版と全く異なりペティの引用はない。

(83) Adolph Blanqui, *l'histoire d'economie politique en Europe*, 1837

(84) MEGA, IV-4 Text

類の増殖に関する一試論並びにロンドン市の成長に関する政治算術もう一論』1682年、第3版、つまり「政治算術別論」と、ペティの死後息子が出版した著書の『政治算術』1690年であり、中間に『政治算術数論』1699年に一括されている、短文の「ダブリン統計のさらなる考察」、「ロンドン・パリの政治算術二論」、「ロンドンとローマの考察」、「政治算術五論」が、ほとんど題名だけ、入っている。「政治算術別論」と『政治算術』が、1859年の『経済学批判』でペティをほめちぎる二つの材料だったことは明らかである⁽⁸⁵⁾。この14年間にマルクスは『租税貢納論』の労働価値説を捉えなかった。だからフランクリンを労働価値説の元祖と誤って褒めることにもなった。1857・8年のノート『経済学批判要綱』⁽⁸⁶⁾でマカロック『原理』には繰り返し触れているが、もっぱら批評の対象とするだけで、ペティの労働価値説を指摘した長い註は、無視したのか目が届かなかったのか、触れていない。

マンチェスター・ノートについても一つ。ここにマカロック『経済学文献分類目録』が抜粋されている。同書は1845年の出版だから、同年の夏に図書館で見られたのはどういう便宜があったのか、いささか不思議なくらいである。だが、MEGAの記述はもっと不思議である。この書の中に『東インド貿易の諸考察』の紹介が含まれる。原本は、初版名—『東インド貿易の諸考察』1701年—を太目の大きい活字で記し、その下に同じポイントだが細字で再版名—『イギリスにとっての東インド貿易の諸利益』1720年—を記した後、編者の解説と激賞を長々と続けているが、その中で著者がヘンリー・マーチンであることを、極めて慎重な筆法で示唆していた⁽⁸⁷⁾。ところがMEGAは、その抜粋ノートの印刷と自称しながら、いきなり再版名だけを記して終わっている⁽⁸⁸⁾。マルクスはマカロックを嫌うあまり、『経済学批判』でも『資本論』でも、初版名も著者名も無視し、そのため、実際にはマーチンを大いに活用し、理論構成においてマーチンを積極的に吸収したにも関わらず、マーチン継承の有力な拠点たる役割を自ら放棄してしまった⁽⁸⁹⁾のだが、MEGAはマルクスのこの偏見の方に忠実に追従するために、原ノートにあった初版名を意図的に消去した、としか考えられない⁽⁹⁰⁾。さもなくばマルクスが飛んだ精神不安定か上下乱視だったことになる。

こう疑ってしまうとMEGA全体の信憑性に問題があることになるが、筆者はMEGA信仰

(85) 参照、馬場、前掲「『経済学批判』の批判」

(86) 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』、大月書店

(87) 参照、馬場「『経済学批判』の批判」

(88) MEGA, 4-4, Text.S188.

(89) マルクスは、ペティ・マーチン両者を高く評価していたのに、彼のマカロック嫌いがペティ労働価値説の発見を遅らせたばかりか、マーチンについてはその名も初版名も伏せたままにさせ、遂にその失敗を補填する機会を見出し得なかった。機会を得なかった一因は、マーチン評価においてマルクスがマカロックの枠を越えられなかったことである。参照、馬場前掲『ヘンリー・マーチンの経済学』4～5ページ、「古典派の比較生産費説」56～57ページ。

(90) この件でMEGA編集部に対する問い合わせを試みているが、目下回答の得られる見込みがない。そもそも国内関係者も問題に気づいていないらしい。

派ではないから、作為的に歪めては資料的価値がなくなると抽象的に非難するに止め、全面的な検討はMEGA学者に委ねる。ただ、この『東インド貿易の諸考察』と関わる「スペクテイター」へのマカロックの言及について、マルクスが「マカロック氏は本当に何も知らない」*Herr McCULLOCH überall unwissend* とコメントした⁽⁹¹⁾のは事実か？との疑いは持つ。この場合マカロックは『政治算術別論』に時計製造分業が書かれていることを見落としていたのだから、批判はあって当然である。しかしまだ1845年、マルクスはマカロックによって経済学入門を進めていた段階である。いくら口が悪いからと言って、「何も知らない」とまで言えたものか。MEGAの編集者がドイツ語の単語に何か加工したのではないか？作為の疑い皆無の文書ならこんなことは言わない。見え見えの作為のある箇所だけに、疑いたくなるのである。

さて、マルクスが刊行しようとした著作でペティの名が登場する最初は1845・6年ころの原稿『ドイツ・イデオロギー』である。その第2章「聖マックス」の註で、競争を人権と解する見解を持つブルジョアジーの代表者の中に、ハムデン、ペティ、ポアギューベール、チャイルドと並べてある⁽⁹²⁾。内容的には、この文章はマンチェスターでペティの原文を読む前に書かれたものと考えておきたいが、物証上は明らかでない。また、著者が「原稿を鼠が囓るのに任せた」ものだから、考証上どこまで有意か判らないが、マルクスがペティに触れたのはこれが最初だとするペティ研究⁽⁹³⁾もあるのでいちおう挙げておく。

この後の1847年、『哲学の貧困』が刊行された。これにはペティが1回だけ登場する。プルードンが土地改良は地代騰貴の原因だとするのに対してマルクスは逆だと言い、だから17世紀イギリスの地主は農業の進歩に反対した、としてペティを参照せよという⁽⁹⁴⁾。おそらく『政治算術』の、諸産業や新奇な技芸が発達すると農業が衰え農夫の賃金が騰貴して地代が低下すると言う議論⁽⁹⁵⁾が念頭にあるのだろうが、いささか強引である。そして、この次にペティが出てくる著書が12年後の『経済学批判』である。

そこで本筋の、マルクスによるペティ労働価値説の把握に戻る。『経済学批判』にはなかった。これは準備ノート『経済学批判要綱』にもなかったと言うことである。マルクスが『租税貢納論』から抜粋を始めたのは1863年からだと言う⁽⁹⁶⁾。つまり『剰余価値学説史』からである。

事実、『剰余価値学説史』第一分冊中にペティは繰り返し出てくる。集中しているのは、第4章「生産的および不生産的労働に関する諸学説」と「補録」である。前者中の「生産的労働と不生産的労働とを区別しようとする初期の試み」はダヴィナントとペティを取り上げている。

(91) MEGA, 4-4, Text, S189

(92) 「ドイツ・イデオロギー」大月書店版『マルクス・エンゲルス全集』3、193ページ

(93) A. Roncaglia, *Petty the origin of Political Economy*, 1985, ロンカリア、津波古訳『ウィリアム・ペティの経済理論』1988年。巻末文献一覧による。

(94) マルクス、『哲学の貧困』、山村喬訳、岩波文庫、189ページ

(95) 前掲『政治算術』、64ページ

(96) 前掲『経済学批判要綱』V、1305ページのメモ書きを見よ。

ここで一旦隣道に入るが、ダヴィナント論はその『東インド貿易に関する一論』を取りあげており、そこへマルクス自身が注意のために「この著書は…マカロックによって引用されている『東インド貿易に関する諸考察』と同じものではない」⁽⁹⁷⁾と、わざわざ書き加えている。つまりマルクスはこの時までには、マーチンの匿名著書の書名が『東インド貿易の諸考察』であることを、マカロックの本のいずれかによって知ったのである。そうならなぜ『資本論』で引用する時に、あままで頑固に再版名『イギリスにとっての東インド貿易の諸利益』だけに拘わり、全く異なる初版名があることを一度も記そうとしなかったのか。それがあれば後世のマーチン継承は遙に豊かになり得、マルクス自身もマーチン継承の拠点としての功を評価されたのである。

因に『剰余価値学説史』でマーチンの著作が取り上げられたのはここけである。『資本論』であれだけ詳しく利用しているのだから、直前の準備ノートに抜粋がないのも不思議のうちである。成果の頂点がマルクス苦手の比較生産費説だったから、と言うのでは説明にならない。MEGA学者の検討を待つ。

『剰余価値学説史』第4章のペティに戻る。ここでマルクスは、『政治算術』を引きながらペティの生産的労働者と分業の利益(海運業における船種の使い分け)とに触れた後、『租税貢納論』を初めて取り上げ、穀物と銀とで同一投下労働同一価値が成立するという箇所、富鉦のおかげで産銀労働が半減しても穀価は上がるが穀物価値は変わらないとする箇所、穀物の純所収と銀の純所収が等価になるとする箇所、100人の農夫がなし得ることを200人の農夫が行なっているところでは穀価は二倍になるとする箇所、を引用している。労働価値説に該当する箇所は全て抜粋されたわけであるが、実はそこはマカロック『原理』の、ペティはリカード説の先駆だと指摘した長い註の内訳に相当する。だがマルクスは、これに続いてペティが、剰余価値に当たる概念を純所収・地代一般として把握していることを指摘しつつ、『租税貢納論』の別の箇所を引用している。

ここはやや長くなるが全文を挙げる。マルクスが、ガニールの仏訳から引用した場合と、ペティの英文から直接引いた場合とがあるので、念のために比較しておく必要が残るからである。まず仏訳⁽⁹⁸⁾から：－

「ある人が自分の手で、ある広さの土地に小麦を栽培するとしよう。つまり彼は鋤き、種蒔きし、馬鋤を掛け、収穫し、納屋に納め、箕で調製し、一言で言えば栽培に必要な全てのことを行なったとすると、この人が種子と自分の食べる分と衣類やその他自然の必需品との交換のために他の人に与える分とを差し引いた時、残りの小麦はその土地のその年の真実の地代であり、七年または豊凶が循環する年数分の平均が、小麦を栽培する土地の正常な地代である。／しかし一歩進んだ傍系の問題がある。この小麦または地代は貨幣で幾らに当たるのか？私の答えは、別の人が鉦山のある国へ行き、採掘し精錬し鑄造して、小麦を蒔き刈り集める人のいる国に持って来た時の

(97)『剰余価値学説史』第四章、大月書店版『マルクス・エンゲルス全集』26I,196～7ページ

(98) Ganilh, *op.cit.*, Tome2, P.36～37

残り全てに値すると言うものである。この人に全ての経費を差し引いた時残る全額は耕作者に残る小麦価値と完全に同じである」 ついで、英語の原文からの邦訳⁽⁹⁹⁾を掲げる：－

「かりにある人が自分で手をくだして、一定面積の土地に穀物を栽培することができるでしょう。すなわち、この土地の耕作が必要としているだけ、掘り・またはすきかえし・まぐわをかけ・除草し・刈りいれ・家にとりいれ・打穀し・そしてふるい分けることができるでしょう。しかもなおそのうえに、この土地にまけるだけの種子をもっていたでしょう。私は言う、この人が自分の収穫物の所収から、自分の種子をさしひき、また同様に自分の食べたもの、および衣類その他の自然的必需品と交換に他人にあたえたものをさしひいたとき、なおそこに残る穀物は、その年のあいだにおけるその土地の自然的な・真実の地代である。そしてこのような七年間の中数、否むしろ凶作と豊作が回転して周期をつくり上げているいく年かの中数が、穀物であらわされた・その土地の・通常の地代である、と。／しかし一步をすすめて、副次的な問題ではあろうが、この穀物すなわち地代がイングランドの貨幣でどれほどに値するかという問題がある。私は答える。それは、別の一人の人が、同じ期間中、かりに貨幣の生産・製造に専心従事したとして、自分の費用のほかに貯蓄しえただけの貨幣である、と。すなわち、別の人が銀の生産される地方におもむき、そこでそれを採掘し、それを精錬し、それを他の人が穀物を栽培しているところにもってくるとしよう、そして同じ人がそれを貨幣に鑄造する等々のことをし、さらにこの人は、銀のために働いているあいだに、生計に必要な食物も集め、衣服も手にいれる等々をするとしよう。私は言う。一人の人の銀は他の人の穀物と同一価値に評価されねばならない、と。すなわち一方はおそらく 20 オンス、他方は 20 ブッシュルであろうが、このことから、この穀物 1 ブッシュルの価格は銀 1 オンスであるという結果になるのである。」 訳者松川と筆者との文体の差を除けば、趣旨の差はそれほど大きくはない。ガニールが翻訳としてでなく引用として仏訳しているために、幾分簡略になったところが、特に産銀者の剰余に関して、あることが見受けられるくらいである。

『剰余価値学説史』の「補録」に、無印の、ペティ、と言う部分がある。ここが、a 人口理論－不生産的職業に対する批判、b 労働時間による価値の規定、c 土地価格、地代および利子の規定、d 土地と労働とのあいだの自然的な同等関係、と区分されているが、ここは総て『租税貢納論』の抜粋である。そしてこの a の中に、『資本論』第一巻最長の註で取り上げた牧師批判があり、b の中に穀物と銀の間の同一投下労働同一価値の議論や、先にガニールの仏訳で引用された、地代規定と穀物地代・銀地代の等価性の議論の箇所が、こちらはペティの英文から、引用されている。

ここの「補録」が第 4 章より後に書かれたのだとすると、マルクスはここに至ってようやく、ペティ理論の全貌をほぼ捕え、『租税貢納論』の、投下労働価値説と相互依存的な剰余価値論の成立に－投下労働価値説の混在を充分に選り分けていないからほぼだが－気付いたことになる。マンチェスター・ノートでペティを取り上げてから 18 年。はなはだ大きな遠回りであった。

(99) 前掲、ペティ、松川訳『租税貢納論』岩波文庫、76～77 ページ

こうして我々もようやく『資本論』第一巻に達した。ここでは、ペティの著作中でまず、「土地が富の母であるように、労働は富の父であり、その能動的要素である」という『租税貢納論』の命題が引用される。これは第1章「商品」第2節「商品に表わされる労働の二重性」の一文で、『経済学批判』に文言は登場していたものの典拠が示されていなかった。当時マルクスは、『政治算術』を繰り返し引用していたが『租税貢納論』は読んでいなかったから、孫引きだったろう。『資本論』でそれが補正されたのである。

次の引用も『租税貢納論』からである。第2章「交換過程」で、貨幣自身の価値は貨幣の生産に必要な労働時間によって規定され、それと同じだけの労働時間が凝固している他の商品の量で表現される、と述べた文に註して、引用する。「もしある人が、1ブッシェルの穀物を生産するのに必要な時間と同じ時間で、1オンスの銀をペルーの地中からロンドンにもってくることができるとすれば、一方は他方の自然価格である。いま、新しい、またはより豊かな鉱山によって、以前の1オンスと同じ容易さで2オンスの銀を得ることができるとすれば、穀物は、他の事情が同じなら、1ブッシェル当たり10シリングでも、以前5シリングだったのと同じ安さであろう」⁽¹⁰⁰⁾。——これは単純素朴な労働価値説として繰り返し言及してきた文であり、フランクリンの労働価値説の下敷きになった文である。マルクスは『資本論』初版の該当箇所でもフランクリンの名を一旦消した。かつて労働価値説の元祖とした早とちりを内々補正したようである⁽¹⁰¹⁾。第二版の註ではもう少し踏み込んで、フランクリンをペティの後の労働価値説論者と述べた⁽¹⁰²⁾。これでようやく早とちりが帳消しになった。その延長上に、『反デューリング論』第二編第十章における、『租税貢納論』でペティは商品の価値の大きさについて「完全に明白な正しい分析を行なっている」という賛辞が来る。

この後の貨幣論では、経済規模に対する必要通貨総量、今日風にいえば流通速度論と関わって、『アイルランドの政治的解剖』と「貨幣小論」が利用されている。登場するペティの著作は結局この三つである。

『資本論』では、ペティの名は他に10回以上挙がる。かなりが誉め言葉を伴う。中にはペティとマーチンを並べてスミスより上だとした場合もある。

ここでのマーチンについては、一度詳しく紹介した⁽¹⁰³⁾から、改めて述べる必要はない。マルクスが、再版の『イギリスにとっての東インド貿易の諸利益』を大英博物館で直接見たのは、『資本論』執筆過程に入ってからかも知れない。無論彼は、この本の存在と、ある程度は内容も、マカロック『経済学文献分類目録』で、とっくに承知していた。だが管見の限りでは同書に関する

(100) 同上書、90ページ

(101) 『資本論』初版の商品・貨幣論にはフランクリンの名がないようである。

(102) 「一流の経済学者の一人であってウィリアム・ペティに次いで価値の性質を見抜いた有名なフランクリンは…」
『大月書店版マルクス・エンゲルス全集』23a, 69ページ

(103) 馬場前掲『『資本論』の一文献』

ノートはない。そして、『資本論』における引用は新鮮感を帯びていて、読んですぐに使った印象がある。

そこで望蜀の言を加えておけば、マルクスにマーチンをもっと時間を掛けて検討してもらいたかった。分業論・機械論の箇所は賃率一定という疑わしい前提があった。信用貨幣・現金貨幣・支払い準備率の箇所はもっと活用できた。比較生産費説もマーチンが素朴な表現をとっているだけに、リカード説より容易に理解できたはずである。こうした点に時間を掛ければ、マーチン吸収においてもマカロックの紹介にある枠⁽¹⁰⁴⁾を越え得、『資本論』体系はもっと豊かになったろうに。

どういうわけかマルクスは、マカロックに対して奇妙に屈折した心情を抱いてしまった。そのため理論形成が制約されただけではない。学説継承においてさえ気付くべき重要な点をいくつか見逃し、少なからぬ欠落を残した。これはスミスの先人無視に匹敵する、学説史上の歪みである。だが労働価値説面でのマルクスの取り柄は、その欠落を、後追いにしろ或る程度は補填したところにある。

(104) 馬場前掲「古典派の比較生産費説」57 ページ